「復興･協同」通信　No.20 (2014.8.19)

“定年 28 号”愛知から東北へ　（1）

中野 明

現在私は宮城県亘理（わたり）町の上下水道課で下水道工事の設計や現場監督を行っています。出身は愛知県の岡崎市で、2 年前に岡崎市役所を定年退職し、昨年（2013 年）4 月から岡崎市の再任用職員として亘理町に派遣されています。

仙台には大学時代の友人の田中史郎さんがいて、仙台･羅須地人協会に誘われたので、2 度ばかり顔をだしたところですが、田中さんから「遠い愛知から東北に復興支援に来ている心情」を「協同･復興」通信に書いてくれと頼まれました。文章を書くことにあまり慣れていないので、遠慮したいところですが、たっての頼みということなので、気恥ずかしい限りですが書くことにしました。

私が、東北に復興支援に来ている理由は、一つには「被災の状況を実際に自分の目で見てみたい」ということ、そしてもう一つは、「こんな自分でも役に立てることがあれば、被災地のためになにかしたい」という二つです。心情は、この二つで言い尽くされていますが、大震災以降今日まで、私にとって東北はどのようなものであったか、またどんなことを感じたか順を追って書いていきたいと思います。

2011 年 3 月 11 日金曜日、私は岡崎市役所の水道局で仕事をしていました。3 時少し前、突然揺れがきました。震度 3 から 4 程度で、物が落ちるようなことはありませんでしたが、いつ終わるともない長い揺れでただ事ではない感じがしました。それでも揺れが収まったので仕事を続けていたら、「関東や東北がすごいことになっているぞ」と誰かが言ったので、テレビの置いてある局長室へいくと、テレビは地震の緊急ニュースを流していました。

東北太平洋沖を震源地とする非常に大きな地震で、津波も発生しているらしいが、流される映像は東京や関東周辺ばかりで、肝心な東北の状況が入ってこない。固唾を飲んでテレビを見ていると、しだいに東北の映像も入ってきました。仙台空港では小型飛行機やヘリコプターがまるでおもちゃのように無造作に流されていました。名取では、陸に上がった津波が真黒な水の塊となって、点在する家も車も押しつぶしながら、農地をさかのぼって行きました。そして、一番衝撃だったのは陸前高田の映像で、浮島のように高層の建物の屋上が残るだけで、周りはすべて津波に飲み込まれた光景でした。一つの都市が潰滅するのを目の当たりにしました。自分の生きている間に日本でこんなことが起こることが信じられず、見ているだけで寒気がして鳥肌がたちました。

大地震に断水はつきものです。水道の世界では、災害が起きると日本水道協会が救援体制を作ります。日本水道協会には、地方支部が 7 つあり、岡崎市は中部支部に所属します。通常は、被災地からの救援要請を受け、支部長の名古屋市が傘下の都市に派遣を要請し中部支部として

派遣隊をとりまとめます。ところが、今回は被災地からの情報が名古屋市にもほとんど入ってきませんでした。被害があまりに大きく、混乱しているうえに通信状況も芳しくないので、救援要請さえ発信できなかったようです。

支部長の名古屋市は、その日のうちに情報をつかむための先発隊を出発させ、傘下都市には、救援の準備を要請しました。岡崎市では、給水車 1 台とタフそうな若手職員 2 名の派遣を決めました。翌 12 日になっても現地の状況はわかりません。朝から待機しており、すこしでも早いほうが良いだろうと、とりあえず東に向かって出発させるという意見もありましたが、どの道が通れるか分からないし、また現地での情報伝達がままならないということで、じりじりと待機状態が続きました。夕方になって、岡崎市の救援先は栃木県の矢板市に決まり、夜 8 時に、水道局現業事務所で派遣隊出発式を行いました。

現地では、給水所で直接市民に給水するほか、給水車を使って、学校や病院などの受水槽に水を入れる作業をしました。1 週間で職員は交替し、2 週間ほどで矢板市での救援活動は終わりました。

水道の断水を解消するためには、水道管の壊れたところを見つけて修理するする必要があります。水道の救援活動は、給水活動のほか、漏水個所を見つける作業と見つけた漏水箇所を治す作業があります。給水活動が終わった後で、支部長の名古屋市から再び要請があり、岡崎市からも岩手県に漏水調査隊 2 名を派遣しました。

以上、3.11 とその直後の岡崎市水道局のかかわりを書きました。ここまでは、私は見ているだけでなにもしていません。次号から私自身の東北とのかかわり方を書きたいと思います。

（なかの　あきら：愛知県岡崎市職員。2012 年 3 月に 36 年間勤めた岡崎市役所を定年退職。2013 年 4 月より宮城県亘理町に派遣。現在、亘理町上下水道課で下水道事業に従事）